

# 第 80 回研究所セミナー 抄 録

日 時

2017 年 1 月 12 日 (木)

18 : 00 ~ 19 : 00

会場

北野病院 5 F きたのホール

総合司会

研究所副所長 福井 基成

研究発表

第 12 研究部 [東西医学研究部門]

第12研究部

～ 司会 福井 基成（第12研究部部长） ～

演題 1

上気道疾患合併喘息における辛夷清肺湯の喘息治療効果

片山 優子（呼吸器内科）

演題 2

「新東洋医学の考え方 ～鍼治療って何？～」

鈴木 雅雄（客員研究員）

## 第12研究部（1）

---

（演題）上気道疾患合併喘息における辛夷清肺湯の喘息治療効果

（演者）呼吸器内科 片山 優子

---

【背景】十分量の吸入ステロイドや、複数の喘息治療薬の投与にもかかわらず、症状コントロールが困難な難治性喘息は、全喘息患者の10%程度存在すると言われており、気管支喘息難治化の一因として、慢性副鼻腔炎等の上気道疾患の合併が知られている。辛夷清肺湯は鼻閉・膿性鼻汁などに効果があるとされる漢方薬であるが、上気道疾患合併気管支喘息に対する喘息治療効果については十分に検討されていない。

【目的】上気道疾患を合併する気管支喘息患者に投与された、辛夷清肺湯の喘息治療効果を検討する。

【対象と方法】対象は2011年9月から2015年2月までに、当院外来にて辛夷清肺湯を処方された気管支喘息患者とした。対象患者のカルテを後方視的に解析し、辛夷清肺湯投与開始半年以内に、臨床症状の改善が確認できたもの、呼吸機能検査・ピークフローメーターの値の改善が確認できたもの、喘息コントロールの改善により治療ステップを下げることができたもの、のいずれかを認めた患者を辛夷清肺湯有効群とし、いずれも確認できなかった患者を無効群とした。有効群と無効群の患者背景を比較検討した。

【結果】対象患者は全40例で、辛夷清肺湯が喘息に対して臨床的に有効と判断しえた（有効群）のは21例(52.5%)であった。年齢・性別・喘息発症年齢等は有効群・無効群で差がなかったが、アスピリン喘息合併・喘息治療ステップ・血清IgE値は有効群で有意に高く( $p=0.022$ ,  $p=0.017$ , and  $p=0.017$ , respectively)、辛夷清肺湯処方日数は有効群で有意に長かった( $p=0.0002$ )。辛夷清肺湯投与により上気道疾患の症状が改善した患者は有効群で有意に多かった( $p=0.0001$ )が、好酸球性副鼻腔炎の合併頻度は両群で差がなかった( $p=0.105$ )。

【結論】上気道疾患を合併する気管支喘息において、辛夷清肺湯が有用な治療薬の一つとなりうることが示唆された。好酸球性副鼻腔炎との関連や、辛夷清肺湯単独での治療効果検討も含め、前向き介入試験でのさらなる検討が必要である。

## 第12研究部(2)

---

(演題) 東洋医学の考え方 ～鍼治療って何?～

(演者) 鈴木 雅雄

---

東洋医学は日本の伝統医療として位置づけられていますが、現代医学との親和性は高いと思っています。東洋医学が日本に伝来したのが飛鳥時代と言われており、その後の平安時代に東洋医学の編纂が行われています(代表的な書物に「医心方」があります)。その後、江戸時代に流星を迎えて明治以降に衰退をしています。

東洋医学の特徴は、症状をターゲットにした医学になります。無数にある患者さん症状を東洋医学的なパッケージ法に変換して診断と治療が展開されます。例えば、全身倦怠感という症状があったとして、そこに息切れ、無力感、他人と話すのが億劫(懶言:らいげん)、易疲労などの症状が併存していれば、気虚(ききょ)証という診断が出来ます。治療法としては四君子湯という漢方薬や足三里、合谷という経穴(つぼ)への鍼刺激を行います。従ってあくまでも症状ベースの医学になります。

一方、鍼灸治療は漢方薬よりも歴史が古く、鍼灸治療では対応困難な状況の際にサルベージとして漢方薬が利用されていたようです。従って、東洋医学では鍼灸治療が first-line として利用されています。

近年、鍼灸治療(特に鍼治療)の研究が盛んになっており、様々な分野での応用が期待されています。鍼治療は鎮痛効果が期待できますが、現在鍼治療は薬剤と同等の鎮痛効果を持つとされています。鍼治療の鎮痛効果には様々なメカニズムが複合的に関与して効果を発現していますが、中枢レベルでは鍼刺激による内因性オピオイドの賦活や脊髄レベルではゲートコントロール作用、末梢ではアデノシン1レセプターを介した鎮痛が挙げられます。また、鍼刺激は必ず中枢に入力されるため、鎮痛以外にも様々な効果が分かっています。例えば、鍼刺激により脳報酬系でのセロトニンの賦活が起り、抗うつ効果が認められており、近年大規模な臨床試験も実施され話題を呼んでいます。さらに、抗炎症効果や遺伝子レベルの研究も進んできています。

鍼灸治療は単なる物理刺激ですが、この物理刺激をどの様に使用したら良いのかを示しているのが東洋医学だと思います。本発表では東洋医学について出来るだけ分かりやすく、先生方にご理解頂けるよう努力したいと思います。

～ メモ ～

## **今後の研究所セミナー等の予定**

### **3月15日(水) 第81回研究所セミナー**

第1研究部 (癌研究部門)

第2研究部 (心・血管・肺・血液障害研究部門)

### **5月17日(水) 第82回研究所セミナー**

第3研究部 (代謝、消化栄養、体液平衡障害研究部癌研究部門)

第4研究部 (免疫、アレルギー、感染、病理研究部門)

**主催 (財) 田附興風会医学研究所北野病院研究所運営委員会**